



レンゲツツジ咲く草原を保全するために 植生保護柵と草刈管理



はじめに

県内の半自然草原群落は、レンゲツツジなどの特徴的な植物種や希少な植物種が生育しており、生物多様性保全や観光資源などの面で重要な位置づけにあります。しかし、近年これらの群落において、ニホンジカの食害、植生の衰退や開花の減少が報告されるようになってきました。そこで、試験研究課題「レンゲツツジなどにより構成される半自然草原群落の保全管理手法の検討 — 甘利山における事例研究 —」(H26-28)では、甘利山の半自然草原群落を中心に、レンゲツツジなどを含む草原生植物へのニホンジカの影響、植生の衰退の要因を推測すること、その推測に基づき、保全・管理手法を提案することを目的として、調査を行いました。



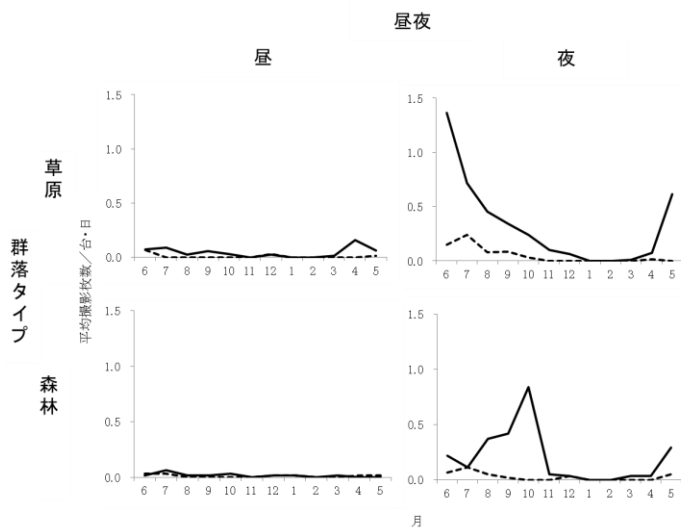
甘利山のレンゲツツジ

ニホンジカの草原への出没

センサーカメラを設置してニホンジカの草原周辺の出没状況を調査しました。

その結果、ニホンジカの出没頻度は、季節では夏、昼夜では夜に高くなっていました。また、草刈り管理などによってミヤコザサの植被率が低くなった場所の方が高い場所よりも頻繁に出没していました。

そのため、ニホンジカの密度が一定以下に低減されていない状態での草刈りは、ニホンジカの草原への出没を増加させ、かえって草原植生の衰退を招く可能性もあります。ニホンジカの密度が低減されていない場合、刈り取りした場所では応急的に植生保護柵を設置するなどの対策が必要と考えられました。



昼夜、群落タイプ、ミヤコザサの植被率別のシカの平均撮影枚数の1年間の変化。図中の実線は自動撮影カメラの設置場所周辺のミヤコザサの植被率が50%未満、点線は50%以上であったことを示す。



センサーカメラで撮影されたニホンジカ

草本植物の保護管理

平成 25 年度より、甘利山の草原群落内に植生保護柵が設置されています。植生保護柵の内外に、①草刈り＋刈草放置区、②草刈り＋刈草除去区、③対照区(無処理区)の 3 管理区を設定し、平成 25 年度から 4 年間、各管理区で植生のモニタリング調査を行いました。

出現種数や種多様度指数は、柵内外で大きな違いは現れていません。種構成としては、柵内で柵外よりシカ不嗜好性植物がやや少ない傾向がありました。種構成の年次変化は、管理区でも、規則性があまりみられませんでした。柵内外ともに、対照区は種数、種多様度指数ともにやや減少しており、草刈り＋刈草放置区において、種数が多い傾向が見られました。

レンゲツツジの保護管理

平成 26 年度に、植生保護柵の内外に設置した、①草刈り＋刈草放置区、②草刈り＋刈草除去区、③対照区(無処理区)の 3 管理区から、レンゲツツジの株を 10 株ずつ、合計 60 株選定し、6 月の開花時に萌芽枝本数、花芽数、高さを記録しました。その株うちの半数の 30 株について、9 月に萌芽枝を剪定してマルチングし、それぞれの個体の生育量等の追跡調査を行っています。

萌芽枝を剪定したレンゲツツジ 30 株のうち 4 株は枯死しましたが、それ以外は新たな萌芽枝が発生していました。剪定していない 30 株のうち、11 株では、平成 28 年に枝の枯損が見られました。レンゲツツジの花数に対する植生保護柵の効果や、植生管理手法の影響はまだはっきりしませんが、今後もモニタリングを継続していきます。

まとめ

甘利山では、ニホンジカの草原への出没が明らかになり、草刈などの管理とともに、応急的な植生保護柵の設置が必要と考えられました。草本植物の種組成にも、シカの食害の影響がわずかに見られ、草刈り＋刈草放置区で種数が多かったことから、草刈りと、草地の乾燥化を防ぐ管理の必要性が示唆されました。レンゲツツジは、剪定をしていない株では枝の枯損がみられ、剪定をした多くの株は萌芽再生したことから、株の枯死を防いで、花数を確保するために、剪定やマルチングの有効性が明らかにされつつあります。今後もモニタリングを継続し、半自然草原群落の保全管理手法について検討を重ねていく予定です。



主に柵内にわずかにみられる絶滅危惧植物 上:ヤナギラン、中:マツムシソウ、下:オミナエシ(甘利山倶楽部提供)



レンゲツツジの花数の調査



植生保護柵

作成：山梨県森林総合研究所
森林研究部 環境科
指村奈穂子・大津千晶・長池卓男

連絡先
TEL 0556(22)8001 FAX 0556(22)8002
メールアドレス sinsouken@pref.yamanashi.lg.jp